

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

# 農作物技術情報 第7号 野菜

発行日 平成26年 9月25日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 台風対策 排水対策と施設の保守点検を万全に
- ◆ 露地きゅうり 重要病害に対する防除の徹底、次年度へ向けた対策準備
- ◆ 雨よけトマト 保温の徹底と裂果の発生防止
- ◆ ほうれんそう 適切な温度管理と病害虫防除の徹底  
適期播種と適切な温度管理による品質向上 (寒締めほうれんそう)

## 1 生育概況

- (1) 8月中旬からの降雨、低温の影響により、全般に草勢の低下や生育抑制が見られるほか、病害虫の発生も増加傾向にあります。
- (2) 露地きゅうりは、低温と急激なべと病・炭疽病等の発生により収穫終了となる圃場も散見されます。
- (3) 雨よけトマトは、気温低下により果実肥大と着色が停滞気味であるとともに裂果の発生が増加しており、出荷量は減少傾向です。オオタバコガの発生はあるものの、防除の徹底により被害は比較的軽微です。
- (4) ハウス・露地ピーマンともに、草勢の低下と気温低下に伴い果実肥大が遅れる傾向にあり、露地ピーマン主体に赤果や黒変果の発生が多くなっています。斑点病・タバコガの被害が、依然みられており9月以降増加した地域もあります。
- (5) 雨よけほうれんそうは、気温低下とともに生育が緩慢になっていますが、概ね順調に生育しています。害虫では、アブラムシの発生が多く、シロオビノメイガによる食害やハウレンソウケナガコナダニの被害が一部で見られます。
- (6) ねぎは、概ね順調に生育し、収穫が継続して行われています。病害虫では、軟腐病が発生している圃場が見られる他、べと病が急増しています。また、さび病、黒斑病、葉枯病、スリップス類、ネギハモグリバエの発生が一部の地域で見られます。
- (7) キャベツは、日照不足により葉色が淡く、低温の影響で生育が緩慢です。病害虫では、べと病、コナガの発生が見られます。レタスの生育は気温低下により緩慢ですが、概ね順調に推移しています。病害では、べと病の発生が多く、腐敗病や軟腐病が一部で見られます。害虫ではオオタバコガの発生はあるものの被害は軽微です。

## 2 技術対策

### (1) 台風対策

この時期は台風が発生しやすいので、気象情報を確認し状況に応じて排水対策、施設の保守点検など、事前事後対策を徹底してください。技術内容の詳細については、H26.9.22発行の「号外 台風対策」を参照してください。

### (2) 露地きゅうり

気温も低下していることから強い摘心は控え、アーチから飛び出した弱い芯を指先で摘む程度に止めます。摘葉は病葉・古葉・黄化葉等を中心に行い、草勢維持を図りましょう。

8月中旬以降、べと病・炭疽病等の発生圃場が多いほか、褐斑病も増加傾向です。多発圃場では、収穫残さや支柱、番線、灌水チューブなどに付着した病原菌が翌年の発生源となりますので、栽培終了後は速やかに残さの片づけや資材の消毒を実施しましょう。

また、本年度株が急に萎れる症状が見られた圃場では、収穫終了後速やかに根を掘り上げて、ホモプシス根腐病の感染がないか確認しましょう。疑わしい症状が見られた場合や、次年度の作付けに不安がある場合は、最寄りの指導機関に連絡し、残さ検診を受けることをお勧めします。

今年萎れが見られていない圃場においても、早期リスク把握の観点から、残さ検診を積極的に行いましょう。



写真1 ホモプシス根腐病による根の状態  
(左上：黒変症状 右：200倍に拡大)

### (3) 雨よけトマト

急激に気温が低下した影響で、裂果の発生が増加しています。

今後、さらに発生しやすい環境が続くことから、夜間の保温に留意してください。この際、ハウスの密閉により湿度が高くなり、葉かび病や灰色かび病がしやすくなるので、防除の徹底に努めてください。

また、裂果の発生軽減技術として全摘葉処理が有効です。全摘葉処理の方法は、9月末から10月初めまでの間に写真のように葉を全て摘んだ後、霜が降りる前につる下げし、不織布でべたがけします。低温や霜の影響が回避され、収穫可能な果実が増加するとともに、裂果の発生を減らすことができます。



写真2 全摘葉処理を行うことで、裂果の発生を防ぎ収穫可能な果実が増加する。時期は9月下旬～10月初めまでとする

### (4) ピーマン

雨よけ栽培では、夜間の保温により生育温度の確保に努めましょう。

全体的に赤果やひび割れ果の発生が増えています。特に、下り枝に着果している果実は早めに除去し、草勢維持と早期収穫に努めて下さい。

また、露地栽培では、斑点病の発生と腐敗果が増加する恐れがありますので、降雨前後にカスミンボルドー等を散布して発生低減を図りましょう。

### (5) 雨よけほうれんそう

年内に収穫するため、もう1作播種することを検討しましょう。低温伸長性の良い品種を選択し、ハウスの開け閉め等による温度管理を適切に行い、年内に確実に収穫できるようにしましょう。

ハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生が多くなります。べと病抵抗性品種を利用している場合でも、日中は積極的に換気を行い、べと病が発生しにくい条件にしなが、殺菌剤の予防散布も行いましょう。

また、ハウレンソウケナガコナダニによる被害が多くなる時期です。近年は夏期に被害が見られる圃場もあり、発生が周年化しています。今年被害があった圃場では、早期に殺虫剤の散布を行いましょう。農薬散布は薬液が芯葉まで届くように丁寧に行いましょう。また、アブラムシ類の発生やシロオビノメイガの食害が見られます。アブラムシ類は効果の高い薬剤で防除します。シロオビノメイガの幼虫は最初、心葉の隙間に入り込んでいるため見つけにくいので、注意して観察し、防除が遅れないようにしましょう。



写真3 シロオビノメイガによる食害 (矢印の部分に幼虫がいます)

作付け終了後は、来年の施肥管理を適正に行うため、土壌診断を受けましょう。

## (6) 露地葉茎根菜類

### ア ねぎ

最終土寄せから収穫までの日数が長くなると、品質低下につながります。9月収穫では収穫の20日前、10月収穫では収穫の30日前を目安に、気象情報等を参考にしながら計画的に作業を行いましょう。

また、収穫間際の病虫害発生も、品質低下につながります。早めの防除を心がけ、農薬散布は収穫前日数に注意して適正に行いましょう。

### イ キャベツ・レタス

県北高冷地の収穫は終盤です。作付け終了後のマルチ、残渣の処理を適切に行いましょう。病害により収穫できなかったものは早めに処理して、被害が蔓延しないように注意しましょう。

また、来年に向けて土壌診断の実施や堆肥の施用等による土づくりを行いましょう。

## (7) 冬春野菜

### ア 寒締めほうれんそう

ハウス栽培では9月下旬から10月中旬までが播種時期です。県内の各地域によって気象条件が異なるので、品種の特性に合わせ適期に播種し、次のことに留意して管理しましょう。

過剰な保温により生育が進むと、寒締めを行う前に収穫サイズに達してしまいます。一方、温度が低すぎると生育が大幅に遅れ、収穫期が遅くずれ込んでしまいます。本県の寒締めほうれんそうの出荷期間は12月～翌2月が基本ですので、ほうれんそうの生育状況に応じて、適切な温度管理を行いましょう。詳しくは平成17年度試験研究成果「寒締めほうれんそうの作期判定と生育調節技術」を参照して下さい。

冬期間は、大雪の影響でパイプハウスが倒壊する場合があります。寒締めほうれんそうを作付けするハウスは1棟おきにして、作付けしないハウスはビニールを外す等、除雪しやすいようにしましょう。

### イ 伏せ込み促成アスパラガス

気温の低下とともに、地下部への養分転流が進む時期です。地上部が自然に黄化して枯れ上がるため、台風による倒伏等で、茎葉が傷まないようにしましょう。

また、根株の無理な早掘りは収量の低下につながりますので、5℃以下の低温遭遇時間を参考に等、適期の掘り上げを心がけましょう（平成18年度試験研究成果「アスパラガス年内どり作型における1年養成根株の掘り取り時期」参照）。

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は  
秋の農作業安全月間です**

**豊作を 無事故で迎える いわたの農業**

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。